



アメノヒボコ伝説にちなんだ「瀬戸岩引きの図」(出石神社所蔵)

歴史街道を行く

# 土木の神様アメノヒボコを 祀る出石を訪ねて

古代から朝鮮半島との交流も盛んで、様々な神話や伝説が残されている兵庫県の但馬地方。その代表的な神話がアメノヒボコ伝説です。古事記や日本書紀にも登場するアメノヒボコとは、一体何ものなのか。なぜ但馬で土木の神様と呼ばれるようになったのか。現在もお人々の信仰を集め、但馬一宮の出石神社に祭神として祀られるアメノヒボコと、但馬地方の土木の歴史を探るため、伝説の中心地「出石」の町を訪れました。



アメノヒボコが祀られる出石神社

## 大規模な治水工事で、但馬の繁栄の基礎を築いたアメノヒボコ

出石の中心部から北へおよそ3km程離れた出石神社は、アメノヒボコが祀られ、土木にゆかりの深いことでも知られています。奈良時代初めに建立されたといわれ、但馬一宮として古代より人々の信仰を集めている出石神社には、但馬の国生み伝説を題材にした「瀬戸岩引きの図」が掛け軸として残されていました。この伝説の主人公がアメノヒボコというわけです。

その昔、円山川から出石川に沿って日本海が長く入り込んで入り江湖を形成していたと考えられています。そのため土砂が堆積し、一帯が泥海で毎年のように水害に苦しめられていました。そこで、アメノヒボコが瀬戸岩山を切り開き、泥流を日本海に流して肥沃な但馬平野を生み出したという伝説を絵にしたのが「瀬戸岩引きの図」です。神話の時代の話で明らかな確証はありませんが、アメノヒボコは朝鮮半島の新羅の王子で、およそ二千年前、垂仁天皇の時代に大陸から但馬に渡って来たといわれています。そして、但馬の地に製鉄技術を伝え、大規模な治水工事を行って繁栄の基礎を築いたことから「但馬開発

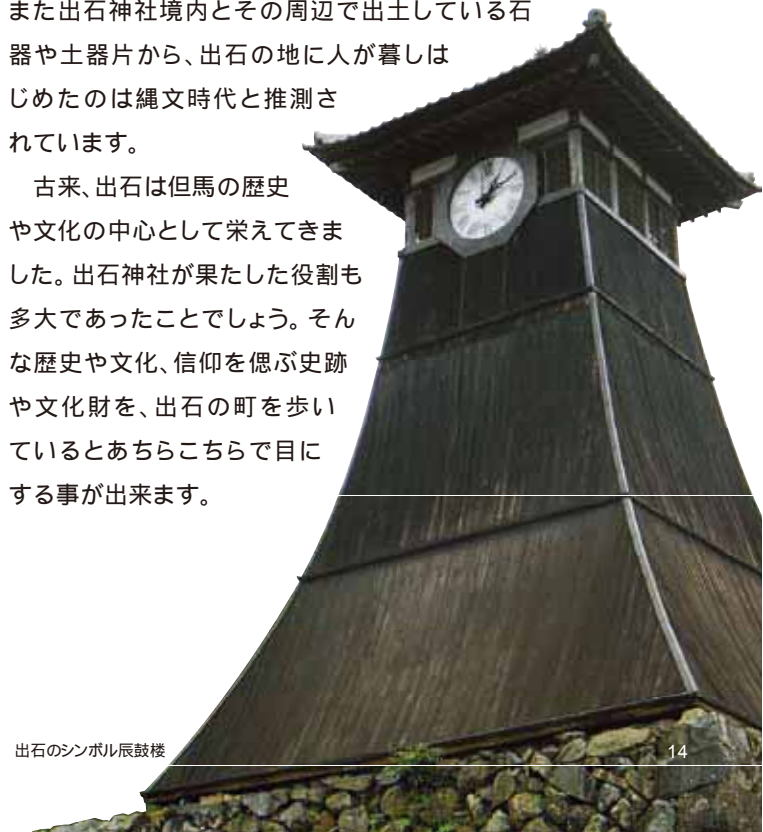
の祖神」と呼ばれるようになりました。つまりアメノヒボコ伝説は、古代の但馬が大陸との交流を盛んに行った象徴として、但馬の国際交流の原点を示しているのだといえるでしょう。

約六千六百坪にも及ぶ広大な神社の敷地内には、禁足地とされる聖域があり、古代より一木一草も刈り取られる事がなかったそうです。その事からここがアメノヒボコの墓が祭祀の場であったのではないかとする説もあります。また出石神社境内とその周辺で出土している石器や土器片から、出石の地に人が暮らしたのが縄文時代と推測されています。

古来、出石は但馬の歴史や文化の中心として栄えてきました。出石神社が果たした役割も多大であったことでしょう。そんな歴史や文化、信仰を偲ぶ史跡や文化財を、出石の町を歩いているとあちらこちらで目にする事が出来ます。



出石の町を流れる谷山川(旧出石川)



出石のシンボル辰鼓楼



宗鏡寺「一願成就の鐘」(左)と沢庵作の庭園(右) 桂小五郎潜伏地跡の碑 おりゅう灯籠



出石城跡の稲荷神社から出石の町を眼下に一望

## ● 激動の時代の名残りを今に伝える出石の町並みと、歴史スポット

三方を山に囲まれた出石町は、江戸時代五万八千石の城下町として栄えました。明治九年の大火により町家の大半を消失しましたが、町割りや当時のままで道路は碁盤の目状に整えられ、城郭や辰鼓楼のある界隈は当時の面影を色濃く残しています。出石のシンボル辰鼓楼は辰の刻(現在の午前8時)に太鼓を打ちならして時を知らせたことからこの名がついたといわれ、現在は時計台として時を刻み続けています。辰鼓楼から北東へ少し歩くと、戦国乱世を生き抜いた孤高の禅僧沢庵ゆかりの宗鏡寺があります。元和2年(1616年)に沢庵和尚が再興したことから、沢庵寺として親しまれています。寺内には、沢庵作の庭園

や夢見の鐘、お手植えのワビスケなど和尚ゆかりの品が数々見られます。また沢庵和尚は沢庵漬を伝えたことでも有名です。

ここから、伝統的な町家の景観が美しい宵田通りを西へ歩くと、明治維新の立て役者、桂小五郎(後の木戸孝允)の記念碑が残されています。有名な池田屋事件をきっかけにおこった蛤御門の変に敗れ幕府に追われる身となった小五郎は、京から但馬へと逃げ延びた際ここで荒物屋を営んでいたといわれます。さらに西へ進むと、谷山川(旧出石川)の大橋東詰めにあった船着き場の名残り「おりゅう灯籠」が見えてきます。

## ● 伝統工芸品としても評価が高いアメリヒボコゆかりの“白磁の出石焼”

出石の中心部を散策していると、そこかしこに目につくのが「出石そば」の看板。出石の味覚としてあまりにも有名な、「出石そば」は、宝永3年(1706年)に信州上田から仙石政明が国替で出石領主として移ってきた時、そば職人を連れてきたのがはじまりで約300年の歴史があります。そばの黒さを映えさせる出石焼きの器も出石の代表的な特産品です。透き通るような白を特徴とする白磁の出石焼きは、アメリヒボコが新羅より渡来した時に連

れてきた陶工が、出石の地で神器や食器類を焼いたのが始まりと云われています。



名物の「出石そば」



出石焼の器

## ● 中世から近世へ。時代が流れても続く円山川との戦い

再び円山川と治水の歴史に目を向けてみましょう。古来、円山川の穏やかな流れは水上輸送に大きな役割を果たし、江戸時代の享保年間から明治初期まで舟運が隆盛をきわめました。豊かな水は田畑を潤し、生活用水として利用され、但馬に多大な恵みをもたらしてきました。一方で円山川は、流域一帯に年に何度も氾濫を起し、農作物の被害はもとより人々の暮しや生命をも脅したといえます。室町時代には「人柱」の悲しい歴史を生み、六方新田の領主新田史朗義直が悪習をなくすよう遺言を残し、自ら人柱になったという歴史悲話も残っています。



出石市街略図

## ● 近代の治水・砂防の礎を築いた但馬出身の二人の技術者

命がけの治水の歴史を刻む円山川で、本格的な河川改修が行われるようになったのは近代に入ってからのことです。「治水組合」がようやく結成された明治時代に、国の管轄のもと人々は河川の大改修を行いました。その後も水害が続いたため、幼い頃から円山川を見て育ち、治水の必要性を感じていた赤木正雄を中心にさまざまな治水対策が行われ、現在に至っています。

樹齢を重ねた樹々が生き茂る出石神社の境内には、但馬出身の土木技術者沖野忠雄の立派な碑があります。沖野忠雄と赤木正雄はそれぞれ「治水の神様」「砂防の神様」

と称されました。アメリヒボコが活躍した古代と2人が活躍した近代。時代には大きな隔りがありますが、いずれも困難な自然に叡智で立ち向かい、土木の発展に大きく寄与した功績者であることは間違いありません。

こうした先駆者達の精神は、今後も治水、土木に携わる人々に脈々と受け継がれ、但馬のさらなる発展を支えていくことでしょう。



出石神社境内にある沖野忠雄の碑

## 土木に駆け抜けた二人の偉人

沖野忠雄と赤木正雄

教育や政治をはじめ様々な分野で優れた人材を輩出している但馬。近代土木、治水・砂防の分野で後世に残る仕事を成した二人も但馬を代表する偉人といえるでしょう。

### 治水の神様 沖野忠雄



略歴  
安政元年(1854年)1月21日兵庫県豊岡市大磯生まれ。治水港湾の始祖として、数々の土木工事に関わる。内務省技師、内務省技監。勲一等瑞宝章受章。工学博士

豊岡藩士沖野春水の子として生まれた沖野忠雄は、明治3年に大学南校(東京大学)に入学。その後物理学修得のためにフランスに留学しました。ここで土木建築を学び、帰国後、内務省の土木技師として一生を治水工事、港湾の開拓に捧げました。大正7年に内務省を退官するまで沖野が関わりを持たなかった河川改修工事はないとまでいわれています。内務省大阪土木出張所長在任当時の沖野の容貌は「常に武家の厳しさと漢学者の気難しさを折衷した人柄」といわれていました。しかし人一倍部下思いで、所員の家庭の事情には絶えず温かい配慮がなされたといえます。沖野が関わった多くの仕事の中でも最も心血を注いだ土木事業が、淀川の改修工事です。淀川の治水については、先に行われたデレーケ、ファンドールン、リンドウたちの工法をわが国の河川様式に修正したことも沖野ならではの大きな功績といえます。大正9年66歳で病死しましたが、京都黒谷の墓前には今もなお香華の絶えることがありません。

### 砂防の神様 赤木正雄



略歴  
明治20年(1887年)3月24日兵庫県豊岡市引野に生まれる。治水事業につき砂防の神様と呼ばれた。農学博士、内務省技師、参議院議員、建設政務次官、豊岡市名誉市民、文化勲章受章

日本の治水・砂防の神様といわれる赤木正雄の生地は円山川の右岸にあり、過去に幾度も氾濫を繰り返して被災しました。豊岡中学卒業後、単身上京し念願の第一高等学校に入学。明治43年9月わが国は大水害を受け、当時の校長が、「治水事業は華々しい仕事ではないが、治水に身を捧げて、水害をなくそうという志をたてる者はいないか」と話されたことがきっかけで、治水事業の道へ進む決意を固めました。東京帝国大学農学部林学科を卒業後、内務省に奉職し全国の砂防工事を指導しました。内務省技術陣のほとんどが土木出身者という中で、一人林学出身の赤木は数々の実績を積み、日本に「赤木砂防」を普及させました。また、渓流河川の改修を、一般河川改修の分野ではなく砂防工場の分野に入れ、ついに土木局内から砂防課を創設するという治水機構の根本的改正を実現させました。円山川直轄工事をはじめ、但馬の河川改修に果たした功績ははかり知れないものがあります。

取材協力: 出石神社 宮司 長尾家典さん  
NPO法人但馬国出石観光協会事務局 森垣康平さん